

たかはし まさし
高橋 政士

新事務局長としての初仕事

●情報労連・副中央執行委員長
(NTT労組中央本部・事務局長)

昨年七月、NTT労組の副中央執行委員長から事務局長に就任。NTT労組では、このような役員人事が初めてだったので、まったく予想していなかった。自分自身が推薦をいただいたことに意表を突かれ、未だ事務局長としての任務に戸惑う毎日である。

約二五年前になると思うが、前身の「全電通」時代にも意表を突かれた役員人事を受けたことがある。四月の定期人事で前任者が突然の転勤、職場から推薦立候補する者がいなかった。臨時分会大会直前まで人選が難航し、結局、役員経験があるという理由から、その職場に着任（約三ヵ月程度）して間もない私が、職場の分会書記長（NTT労組は「書記長」から「事務局長」に改名）を任されることとなったのである。あの時も突然の就任だった…。

当時の職場は、電気通信設備を二四時間体制で保守・運用・監視する時代であり、組合員の服務線表（いわゆる勤務表）で労使対立が続いていた。前任者たち（前執行部）は、会社側が提示した新たな服務線表の人員配置案に抵抗。新事業年度を迎える一ヵ月前に至っても「三六協定」を締結できないでいた。昇進任用による定期人事を拒んでいた前任者は近心の組合員に諭され、渋々人事を受諾した。仕方なく前執行部は、三月下旬ギリギリ

で「三六協定」の暫定措置による服務線表で労使合意し、四月からの事業年度をスタートしたのである。

当然、三月下旬に開催した臨時分会大会で新書記長を拝命した私に新たな服務線表に関する労使交渉が託されたのである。組合側が主張する「人員増配置」に対し、人員削減を前提とした効率化を前面的に主張する会社側と真っ向から対立。数ヵ月に及ぶ団体交渉を重ねても結論が出ない日々が続いたのである。その間、組合側は日々の休日・時間外労働の事前協議で徹底した抵抗を図り、会社側を追い詰める作戦を展開した。組合側から「こんな事由では、組合員の時間外労働を認めるわけにはいかない。管理職が対応すべきだ」と主張。当時の会社側も意地があったのか、でき得る限り管理職だけで休日・時間外労働に対応し、何とか業務を乗り切っていた。組合側から見ても「骨のある管理職もいたものだ」と感心したほどだ。現在の管理職では、電気通信技術の急速な進歩に伴って現場対応は困難ではないか、と思われることも申し添えておきたい。

労使交渉を開始してから七ヵ月以上経過したある日、恐らく十一月下旬だったと思うが、溝が深まるばかりの職場を慮って、久しぶり



に団体交渉を再開することとなった。しかし、職場労使が互いに数ヵ月に及ぶ消耗戦を繰り返していたこともあり、労使ともにいらだった交渉となったのである。書記長の私から「いい加減、人員の増配置を検討しろ！」と言い捨て、机を叩いた瞬間、机に置いてあった歪んだアルミの灰皿が宙に舞ってひっくり返った。そこに間髪入れずに、会社側の筆頭交渉委員が「そんなことできるか！」と言い返し、机を叩いた瞬間、今度はひっくり返った灰皿が、なんと見事に元に戻ったのである。緊張感ある団体交渉の場が一瞬のうちに嘲笑を誘う場に変化した。変な雰囲気になりかけたので直ちに交渉を打ち切ったものの、笑いを我慢している会社側交渉委員の滑稽な姿を見て「そろそろ潮時（労使決着）かな…」と感じたことを思い出す。

数日後、何としても年内決着を図りたい会社側から、「来年四月の定期人事で人員を増配置したい」との回答を受け、新たな服務線表を受け入れることとした。結果として、一二月に労使決着を図り、翌年一月一日から新たな服務線表がスタートした。新書記長として“初めの大事な仕事”は、難産に難産を重ね、生みの苦しみを味わいながらも労使決着を果たしたのである。その後、書記長時代には大きな案件もなく、長く対立していた会社側とも労使信頼関係を築き、職場でスムーズな事

業運営が続いたのである。

新年を迎え、新事務局長としての“初めの大事な仕事”は、二〇一四春季生活闘争である。連合は「デフレから脱却し、経済の好循環を作り出す」ことを実現するための「底上げ・底支え」「格差是正」に向けた取り組みと位置づけ、すべての働く者の処遇改善の実現をめざし、公正で安心・安定的な社会の実現をめざす考え方を掲げ、すべての構成組織が「月例賃金にこだわる」闘いを進める方針を決定した。

私たちNTT労働組合も、連合と産別である情報労連の闘争方針を踏まえ、過年度物価上昇相当分などの賃上げ（一%以上）として、各社に対して求めることを前向きに検討している。もし、賃上げ要求の方針が二月の中央委員会で決定すれば、七年ぶりの賃上げ要求である。NTTグループの持続的成長・発展に向けた仕組みづくりを重視する会社側（経営陣）にとって、組合側が主張するべア要求は現社会において大きく乖離した要求と言えよう。新年早々、厳しい闘いが続くことが容易に想定できる。新事務局長としての“初めの大事な仕事”でどのような成果を得ることができると分らないが、一七万八千組合員の負託を受けた要求を高らかに掲げ、今次春闘を闘い抜く決意である。